6. ESDとしてのハチドリ計画

●持続可能な社会のために

ESDというのは、「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development)」のことで、環境問題や貧困問題を解決し、人々が共にこの地球で暮らし続けていくための持続的な社会を教育によってつくるという崇高な目標を掲げています。

気仙沼市は、2005年に国連大学から「国連・持続可能な開発のための教育の10年」(DESD) の認定を受けて、モデル地域としてESDを推進しています。大谷地区は本吉町でしたが、2009年に気仙沼市と合併したことから、大谷ハチドリ計画はESDの実践事例として位置づけられることになりました。

大谷ハチドリ計画は、「地域に根ざした教育」として地域の自然や暮らしを守り伝える取り組みですが、実はそれこそが持続的な社会につながるものと考えています。ですから、ハチドリ計画とESDは志を同じくする取り組みといえるでしょう。

●「開発」が問うもの

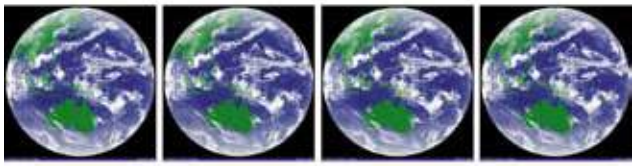
ところで、「持続的な社会」という目標をかかげながら、名称はなぜか「持続的な開発」となっています。このことが、現場の教師にわかりづらさや違和感を抱かせているようです。ESDの内部でも、「開発」が自然破壊につながる言葉であり、「矛盾した述語」という指摘もあったようで、そのことから「開発」の意味は、「人間開発」や「社会開発」であると補足を加えています。

しかし、こうした補足は「開発」が抱える本質的な問題を見失わせてしまうことになります。「開発」は英語のdevelopmentの訳語で、発展とも訳されます。この言葉は、先進国と途上国を表すdeveloped country とdeveloping country、つまり「発展した国」と「発展している国」として使われています。

では、「発展している国」はいつかは「発展した国」になるのでしょうか。右の写真はある途上国の30年前の写真です。しかし、これが現在の写真といっても通用するでしょう。30年前と同じ境遇の子どもたちが今なお存在しているという事実を、私たちは忘れてはならないのです。

途上国が先進国と同じ生活をするためには、地球が4つ必要になるという試算もあります。しかし実際には地球は一つしかありませんから、先進国が先進国であり続けることは、途上国はいつまでも途上国であり、写真の子どもたちもまた存在し続けることになります。「開発」という言葉は、途上国の人々から「先進国」に住む私たちにその応(こた)えを求める問いでもあるのです。

20%の先進国が地球資源の80%を使っている。



途上国が先進国と同じ生活をするには地球が4個必要。

● ESDは天の配剤

ESDは、みんながいつまでも幸せに暮らせる社会をつくろうと、世界中の人々の思いが集まって始まりました。そして、その思いは教育の力に託されているのです。他人の不幸を踏み台にしての幸福などありえませんし、松枯れで白骨化した松の姿やドラム缶に住む子どものまなざしに応(こた)えるものとして、ESDはあると考えています。

2 母なる環境としての「ケセン」

●大谷もケセンなのっさ

かつて大谷はケセンであった、と聞いて皆さんは驚かれるかもしれませんね。

ケセンという地名は、岩手県に気仙（大船渡・陸前高田・住田）としてその名が残されています。しかし、今から1,200年も昔には気仙だけはなく、宮城県の気仙沼・本吉から北上川より東の石巻や牡鹿までの広い地域もまたケセンと呼ばれていたのです。（下図）

このケセンの地で、私たちの祖先であるエミシは縄文以来の狩猟採集の社会を形成していました。この狩猟採集の社会では、食物は山や海など自然を支配する神々からの恵みとして誰もが平等にいただくことのできるものとされていました。

（画：山浦玄嗣）

「神々のふところ」は深く豊かであり、稲作農耕に頼る必要もありません。部族ごとに充足した共同体が生まれ、やがてそれぞれの部族は互いに対等な関係を保ちながら、ゆるやかに結びついた連合体が成立します。それがエミシの国・ケセンだったのです。

しかし、後に日本に渡ってきたヤマト族がこの豊かなケセンの地を我が物にしようと侵略を始めます。その侵略は執拗かつ苛烈を極めるものでした。ケセンはその領域を次第に失い、今やその古来の名を保っているのは最北の気仙地方だけになってしまったのです。

ヤマト族の侵略により、私たちケセン人はどのような歴史をたどったのでしょうか。歴史書のほとんどは征服者によって記されていますから、その歴史を伝えるものは残されていません。しかし、それでもなお、ケセンの魂は絶えることなく息づいています。それこそがケセンという「環境」なのです。

●オラほの言葉は「ケセン語」

それは単に「自然環境」だけのことではありません。ケセンの自然に寄り添う暮らしそのものが、私たちの心や身体を育む「環境」として縄文の時代から受け継がれています。そして、そのなによりの証拠が私たちの母語である「ケセン語」なのです。

「我々の先祖は、大陸文化の物真似でなく、真に自らの力であの独創的な縄文文化をこの列島に築きあげた北方縄文人であります。あの燃え上がるような火焔土器の強烈な個性こそは、我々東北の民が自らの燃える魂を自らの手で表現したヒタカミ（東北の古名）の創造精神の象徴です。我々こそは、太古の暗闇の中から、絶海の孤島であったこの竜の形の日本列島に自らの力で輝く文明を創り出したあの栄光の縄文人たちの直系の子孫であります。その言語（ケセン語）こそは、栄光の過去を担い、数千年の間にこの列島に高貴な光を掲げた民族の香りを今に伝えるものなのであります。」（山浦玄嗣

『ケセン語入門』「序論・母なる国ケセン」)

そして、「われわれの言語・ケセン語は、一万数千年という途方もなく長い伝統を持つ縄文エミシ語の文化を分厚い基層にして、その上に征服者ヤマト族の言語が、千年そこそこの短い歴史時代を通じて、変形しつつかぶさってきた。」(山浦玄嗣『ケセン語大辞典』序論)

表層のヤマト語を剥ぎとれば、ケセン語の基層には、ヤマト族の支配に頑強に抗してきた「まつろわぬ(服従しない)民」ケセンエミシの魂が深く強く息づいていることを山浦先生は掘り起こされたのです。さらに、ケセン語の内部構造を解き明かすにつれて、それが学校文法をはるかに凌駕し、日本語全体の構造にも通じる壮大な体系を持つことが明らかになってきました。

山浦先生は聖書をケセン語で訳し直すという大事業を成し遂げられ、それによってイエスがどのような人物であり、彼が伝えようとしたものは何かを明らかにされています。ケセン語という言葉には、物事の本質を見抜く力が備わっているのかもしれません。

山浦先生の『ケセン語大辞典』には3万4千という膨大な語彙が収録されています。驚くことに「ここにはわたしの耳で聞いたことのない語彙は一つもない」のです。これほど豊かな語彙を実際に生きた言葉として使っているわけです。このことを私たちケセン人は高く誇ってよいはずです。

●ケセンを大事(でァず)にしァすぺ

ケセン語の素晴らしさは豊かな表現と壮大な文法体系だけではありません。言葉を発するとき、その声はその土地の自然が奏でる深い調べ(リズム)に呼応しています。「ズーズー弁」などでは決してない。ケセン語の独特の音調(アクセント)にもケセンの豊かな自然が息づいているのです。

息づく地を持たないゆえに標準語が単調なリズムしか持ちえないのはそのためでもあります。ケセン語の音調が標準語と異なるのは当然であり、その違いを気にかけても仕方のないことです。母なる「環境」としてのケセン、そしてケセン語を、私たちはかけがえのないものとして守り、つないでいくことが、ケセンに生きる者としてのつとめであろうと思います。

●山浦玄嗣先生のプロフィール

1940年東京で生まれ、釜石市、気仙郡越喜来村に育ち、その後気仙郡盛町(現大船渡市)に移る。

1966年、東北大学医学部卒業後、1971年、同大学院医学研究科外科学専攻卒、医学博士となる。1981年、東北大学抗酸菌病研究所放射線医学部門助教授。1986年、郷里に戻り、大船渡市盛町で山浦医院を開業し、現在に至る。

専門の医学のかたわら、ふるさと気仙地方の言葉『ケセン語』の研究に余暇を捧げ、『ケセン語入門』(1987年、日本地名学会「風土研究賞」受賞)、詩集『ケセンの詩』(1989年、岩手県芸術選奨受賞)、ケセンの歴史を書いた『ヒタカミ黄金伝説』(1998年、自費出版文化賞ー学芸部門ー受賞)、『ケセン語大辞典』(2000年、岩手日報文化賞受賞)、『ケセン語新約聖書・マタイによる福音書/マルコによる福音書/ルカによる福音書/ヨハネによる福音書』(2002〜2004年、大船渡印刷)、『父さんの宝物』(2003年、イー・ピックス)、『ケセン語の世界』(2007年、明治書院)などの著書がある。1990年、岩手県地方の言葉の研究と文化の振興により岩手県教育表彰受賞。2002年、大船渡市市政功労者表彰(文化功労)受賞。

3 大谷ハチドリ計画年表 (2004–2011)

年　度	2004 年度
活動 / 種類	●ハチドリ計画・松枯れ学習開始
山(林業) 松枯れ・ 林業再生	**11 月 5 日** 現地調査・学習会 **3 月 23 日** アカゲラ巣箱設置・松林清掃（大谷海岸）
海(漁業) 磯焼け・ 漁業再生	**2 月 28 日** チョウセンハマグリ汀線調査（第 1 回）
田んぼ(農業) たんぼ・ 生物多様性	
文化・言語 自然再生 エネルギー連携	
記事資料	 深刻さに驚きの声 広がる松くい虫被害 本吉町 大谷中 生徒が現地調査 アカゲラ君 頼みます 大谷中生が巣箱 松くい虫防止の手段 媒介・カミキリの天敵 本吉町で17日

2005 年度

11 月 16 日
松枯れ学習と松林清掃（森林管理署・藤原勝志先生）

2 月 16 日
松枯れ学習会
（藤原・唐澤）

3 月 22 日・23 日
アカゲラの巣箱作りと巣箱設置（沖の田）

5 月 26 日
チョウセンハマグリ汀線調査（第 2 回）

●地域連携・松林再生スタート　　●磯焼け学習開始

4月24日
松林再生に向けて・おかめ浜植樹

5月17日
松枯れ実態調査（中１）

5月24日
磯焼けから海中林へ（東北大・谷口和也先生）

2006 年度

●ふゆみずたんぼ学習開始

11 月 16 日
中１現地学習会（地方振興事務所・唐沢悟先生）

3 月 22 日
アカゲラ巣箱設置・松林清掃（沖の田）

10 月 3 日
水産試験場見学会

6 月 3 日
東北大との
合同海藻群落調査

7 月 12 日
本吉響高校ふゆみずたんぼ学習会（鈴木康先生）

● GLOBE 活動校認定　●ふゆみずたんぼ開始　●海藻調査開始

4 月 16 日
大谷海水浴場の植樹

5 月 16 日
第 1 回海藻採集・群落調査（谷口・吾妻先生）

4 月 16 日
たんぼと生き物の循環（鈴木先生）

4 月 6 日
微生物調査

4 月 26 日
籾播き・苗代づくり

5 月 25 日
ふゆみずたんぼ田植え（世代間交流）

2007 年度

●下草刈り開始

6 月 1 日
下草刈り（1 年目）

11 月 14 日
中 1 現地学習会（本吉町・三浦久俊先生）

8 月 5 日
第 2 回海藻採集・群落調査（谷口先生）

6 月 18 日
本吉響高校ふゆみずたんぼ見学会

7 月 16 日
除草

10 月 11 日
稲刈り

11 月 1 日
脱穀

11 月 30 日
ドゥマルシェと子供たち

2007 年度

●海中林再生計画開始　　●田んぼの生き物調査

2月7日
森林・林業技術交流発表会（秋田）

12月6日
本吉町水産振興シンポジウム

1月29日
コンブ生育調査準備

12月18日
わら散布・水入れ（たんぼの準備）

1月25日
命をつなぐ未来をつなぐ
（岩渕成紀先生）

3月21日
田んぼに海藻（ワカメの茎）散布

2月29日
フランス「塩の華」で試食会

2008 年度

●コンブ生育調査開始　　●幼稚園と連携

4 月 21 日
断崖の松林に植樹（天ヶ沢）

6 月 19 日
下草刈り（2 年目）

4 月 17 日
コンブ成育調査（第 1 回）

7 月 2 日
コンブ成育調査（第 2 回）

7 月 31 日
海藻染めワークショップ
（村田澄子先生）

4 月 23 日
籾蒔き･苗代づくり

5 月 14 日
コガモ飛来

6 月 2 日
人間代掻き

6 月 5 日
田植え（幼稚園参加）

7 月 11 日
除草

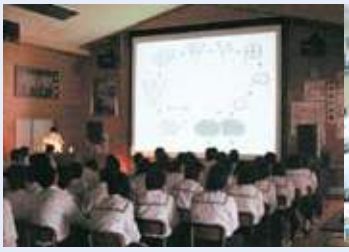
6 月 18 日
アースキャラバン 2008・ワークショップ

●ウニ生育調査開始

8月23日
森林防除コンクール林野庁長官賞受賞

8月8日
コンブ採集・収穫

9月26日
ウニの生態と解剖実習（東北大・吾妻行雄先生）



9月21日
生き物調査（岩渕先生）

10月8日
いもち病（農改センター・千田晶子先生）

2008 年度

11 月 21 日
中１現地学習会（地方振興事務所・岸野清先生）

2 月 10 日
ウニ成育調査（吾妻先生）

10 月 10 日
稲刈り

11 月 12 日
ワラ・ヌカ散布

12 月 8 日
田園自然再生活動
コンクール入賞

3 月 19 日
イトミミズ調査開始

3 月 28 日
アースキャラバン・スクール本吉

●教育ファーム実証団体認定

●幼小中連携の田植え

4月16日
沖ノ田植樹

6月18日
下草刈り（3年目）

7月9日
松枯れ現地学習会

6月24日
多様な海藻が支える豊かな海（谷口和也先生）

5月1日
籾蒔き・苗代づくり

5月18日
たんぼを支える小さな生き物
（岩渕先生）

6月9日
田植え（幼稚園・小5参加）

6月20日
NHK「Save the Future」で大谷中学校を放映

2009 年度

●ハチドリ計画小中連携開始　　●ワカメ養殖開始

7 月 10 日
森の多様性と仕組み（東北大・清和研二先生）

12 月 8 日
ワカメの種はさみ（小３・４）

12 月 24 日
農林水産大臣賞受賞で知事表敬訪問

10 月 21 日
稲刈り（幼稚園・小５参加）

12 月 21 日
「ふゆみずたんぼ米」豊作・初売り

10 月 8 日
大谷小ハチドリ計画キックオフセミナー（吾妻・清和・岩渕先生）

ハチドリの仲間増える
地域ぐるみで環境学習
大谷中から小学校、幼稚園でも
来年度スタート

大谷小・中学の環境学習と連携
自然の仕組み学ぶ
3～6年生が最初の勉強会
大学院教授らが講話

『三陸新報』2009.12.09
ほとんどが初めて
大谷小　ほお真っ赤にワカメまき
寒風吹く中、ワカメの種はさみ体験

大谷中に農水大臣賞
全国豊かな海づくり大会
磯焼けなど環境活動評価
中学校では史上初

2009 年度

●松林復元プロジェクト開始

1 月 14 日
小６現地学習会（振興事務所・山田百合子先生）

3 月 17 日
沖ノ田植樹

美しい松原の復元目指し
新たなプロジェクト展開
大谷中 木々が生い茂る海岸に
地域や保護者も参加
新年度から

1 月 14 日
よいウンチはワカメがつくる（大谷小）
環境を守る沿岸漁業 (大谷中)

1 月 16 日
教育ファーム推進全国大会（東京）

ハチドリ計画を発表
大谷中 全国ファーム大会に招かれる
環境活動高く評価

3 月 12 日
ワカメの茎散布

4 月 30 日
籾蒔き・苗代づくり
（中３・小５）

大谷小と大谷中 協力して手作り
「ふゆみずたんぼ」の苗代
自然に優しい農法
園児交えた田植えも予定

2010 年度

●幼・小・中連携開始

6月4日
下草刈り（4年目）

6月19日
大谷海岸松林復元

5月7日
大谷定置網の歴史（佐藤昭治郎先生）

6月14日
海藻調査（谷口先生）・磯洗い（海藻復元のための貝落し作業）

5月28日
人間代掻き（小5・6）

6月1日
幼・小・中全員が参加した田植え

●ケセンの言葉と歴史の学習開始

7月2日
森の再生をみんなの力で（田中優先生）

1月14日
小６現地学習会

自然環境を守ろう
松枯れの現状学ぶ

12月10日
ワカメ養殖（小３）

1月31日
ワカメの成長記録（第１回）

10月8日
稻刈り

7月1日
ＥＳＤ教育視察

1月28日
母なる「環境」としてのケセン（山浦玄嗣先生）

ワカメ種はさみを体験
大谷小「ハチドリ計画」
「海藻食べて健康に」
東北大教授の特別講話も
ほとんどの児童が初体験の種はさみ

2010 年度

●東日本大震災

3 月 11 日
東日本大震災

2 月 28 日
ワカメの成長記録（第２回）

3 月 4 日
海のゆりかごとハマグリ（山口正士先生）

2 月 6 日
田んぼの生物多様性（岩渕先生）

3 月 12 日
地球にやさしい作文コンクール・
内閣総理大臣賞受賞

「冬水田んぼ」で日本一

藤澤君が総理大臣賞

環境作文コンクール 大谷小での体験綴る

砂浜は海のゆりかご

大谷小中 ハマグリと環境学ぶ

全国各地でとれた貝を観察

2010 年度

●東日本大震災　●ふゆみずたんぼ復興　●ハチドリ計画再開　●エネルギー学習開始

3月11日
東日本大震災

7月7日
下草刈り（5年目）

負けずに成長して
ハチドリ計画 残った松林の下草刈り

4月29日～5月8日
ふゆみずたんぼ復興プロジェクト

6月7日
田植え

冬水田んぼ
復興のシンボルに
本吉 大谷 再生向けボランティアが汗
冬水田んぼ復活を手助けするボランティア